

共同研究 海域・海村の景観史に関する総合的研究

期間：2015 年～

〔所員〕 安室 知 内田青蔵 大川 啓 小熊 誠 昆 政明 佐野賢治 後田多敦
須崎文代 関口博巨 泉水英計 高城 玲 平井 誠 廣田律子 前田禎彦
安田常雄

〔客員研究員〕 橋村 修 橋本道範

〔研究協力者〕 石井和帆 小野寺佑紀（歴史民俗資料学研究科博士後期課程）

2018 年度 活動報告

安室 知

〔研究目的〕

本研究所はその発足の早い段階から海域・海民史の研究に取り組み、これまでも能登半島や瀬戸内海の島嶼部などにおいて多くの研究蓄積をなしてきた。また近年は、国際常民文化研究機構のものと「海域・海民史の総合的研究」として3つの共同研究を企画・実施してきた。本共同研究はそうした研究蓄積を継承し、日本常民文化研究所全体として海をテーマにした研究を発展させようとするものである。



写真 1 第 7 回漁場図研究会（中央水産研究所）

海は水産物だけでなくさまざまな資源を生み出す。そして、その開発・利用に当たっては、人・物・情報の行き来を促し、そうした営みを通して社会知や民俗知が膨大に集積される空間となっている。反面、負の記憶として、海域の利用をめぐる個人や村のレベルから国際的な問題までさまざまな対立や紛争を生んできたし、また海という大自然とたえず対峙する海村では大きな災害や事故が歴史的に繰り返されてきた。そうした海域・海村の歴史民俗文化について、漁場図など絵図として残された景観を手がかりに、本研究所の人的資源を活用し学際的に研究することが本共同研究の主たる目的となる。

〔2018 年度活動〕

1. 研究会

2018 年度第 1 回（通算、第 7 回）の「海域・海村の景観史に関する総合的研究」研究会（通称、漁場図研究会）は、2019 年 1 月 25 日（金）に、国立研究開発法人水産研究・教育機構中央水産研究所（第 2 会議室）を会場としておこなわれた。スケジュールは以下の通りである。

- ①「はじめに——趣旨説明——」（安室知）
- ②「漁場図データベースの作成について」（石井和帆）
- ③「GIS を用いた漁場図の空間復元に関する一事例」（清水健太郎：東京学芸大学研究生）
- ④「琵琶湖におけるエリの歴史的展開と民俗技術——伝承資料と筆写稿本から——」（安室知）
- ⑤「GIS による漁場図研究の可能性——尾鷲の資料を例にして——」（竹村紫苑）

今回の研究会は、本研究テーマについてかねてから研究交流をすすめる中央水産研究所と共催されたものである。そのため、中央水産研究所および日本常民文化研究所から、多数の所員、職員、客員研究員などが参加した。

研究代表者による趣旨説明の後、4 名の発表者がそれぞれ研究発表をおこなった。

1 番目は、「漁場図データベースの作成につ



写真 2 発表者／竹村紫苑



写真 3 発表者／石井和帆



写真 4 発表者／清水健太郎



写真 5 発表者／安室知

いて」と題し、石井和帆氏から常民研の所蔵する 2,000 点を超す漁場図についてすすめているデータベース化の概要と作業の進捗状況について報告がなされた。

2 番目は、「GIS を用いた漁場図の空間復元に関する一事例」と題し、清水健太郎氏から GIS を用いた漁場図の空間復元について具体的な事例に基づく報告がおこなわれた。

3 番目は、「琵琶湖におけるエリの歴史的展開と民俗技術」と題し、安室よりエリ師から聞き取った伝承資料と漁場図の母体となる筆写稿本を用いたエリ漁の歴史的展開についての発表がなされた。

4 番目は、「GIS による漁場図研究の可能性」と題し、竹村紫苑氏より、尾鷲の漁場図を事例として GIS による歴史史料の解析手法についてその可能性と問題点について発表がなされた。

以上、4 題の研究発表の後、フロアーを含めての質疑応答がおこなわれた。その中では、漁場図が描かれる背景となる漁業権に関する基本的理解について、また漁場図のような歴史史料に GIS を応用することの意義について、さまざまな議論がなされた。

また、今後も本共同研究においては、中央水産研究所と日本常民文化研究所との研究協力関係を発展させることの意義について確認された。

2. 個人調査

「スダテ漁法の分布と漁場図に関する調査」（安室知、2019 年 3 月 26 日～3 月 29 日）

常民研が所蔵する漁場図のひとつに^{えり}魎図（琵琶湖）がある。2017 年度には滋賀県庁において魎申請のための漁場図を調査した。2018 年度は、それに関連して、同型漁法（スダテ漁法）の分布調査を企画した。とくに同型漁法が濃密に分布すると予測される日本海岸の潟湖に注目し、まずは新潟県にお

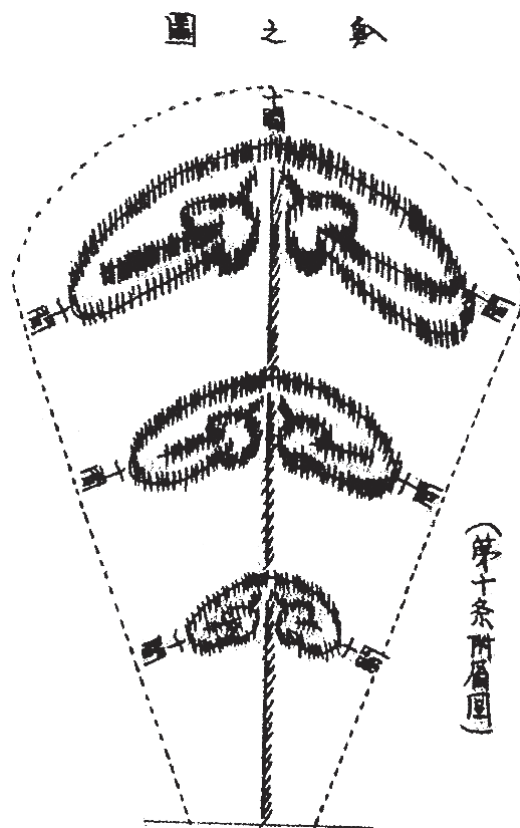


写真 6 筆写稿本の中の魎図



写真7 福島潟



写真8 鳥屋野潟

いて調査をおこなった。

新潟県立図書館において、おもに自治体史および民俗調査報告書を用いてスダテ漁法の分布を調査した。その結果、福島潟、鳥屋野潟、鎧潟、佐潟においてかつてスダテ漁がおこなわれていたことが確認された。また、福島潟と鳥屋野潟では、実際にスダテ漁がおこなわれた湖岸地域を巡検した。

鎧潟では昭和 37 (1962) 年の記録「簀建場所抽選控」が確認され、当時鎧潟の周囲が漁場として 12 分割されていたこと、およびそれが抽選により漁業者に割り当てられていたことが分かった。さらに、天保 2 (1831) 年の記録「永用留書」では江州滋賀郡大津堅田町（現大津市堅田）の住人が鎧潟においてスダテによる漁業を願い出て許可されていることも分かった（『鎧潟——鎧潟干拓地域民俗資料緊急調査報告書——』1966 年、新潟県教育委員会）。近世期において琵琶湖のエリとの関係が確認され興味深い。

3. 関連事業

「漁場図翻刻プロジェクト」

2018 年度より、漁場図データベース化の一環として、漁場図翻刻プロジェクトを立ち上げ、関口博巨所員の指導のもと、研究協力者および KU ポートスクエア古文書講読講座の受講生有志により筆写稿本付図上の文字を翻刻する作業をおこなっている。

■ 2018 年度の活動

○第 7 回研究会

「漁場図データベースの作成について」石井和帆

「GIS を用いた漁場図の空間復元に関する一事例」清水健太郎（東京学芸大学）

「琵琶湖におけるエリの歴史的展開と民俗技術——伝承資料と筆写稿本から——」安室知

「GIS による漁場図研究の可能性——尾鷲の資料を例にして——」竹村紫苑（中央水産研究所経営経済研究センター）2019 年 1 月 25 日 中央水産研究所

○スダテ漁法の分布と漁場図に関する調査 2019 年 3 月 26 日～29 日

新潟県立図書館、鳥屋野潟、福島潟 安室知

○漁場図データベースの作成（通年）石井和帆・小野寺佑紀、太田原潤（院生）

○漁場図翻刻作業の実施（通年）漁場図翻刻チーム／飯島勸・池田真紀子・磯部満・岡田茂・笠原和子・川副禮子・児玉幸晴・小山昭一・佐々木公文・野村玲子・藤井泰助・山口明男